

## 滅私奉公

第5期 OB 池谷 真剛

もし小野ゼミ大学院生が『もし高校野球のマネージャー（マネージャーではなく）が〇〇を読んだら』を読んだら、という訳では決してないが――。

ゼミは、高校野球に似ている。高校野球では、毎年4月に1年生が希望と緊張に溢れた面持ちで入部し、その年の8月には3年生が泣きながら引退する。毎年チームの顔ぶれの3分の1は入れ替わるため、今年はどんなチームになっているのか、見る者を楽しみにさせてくれる。一方、チームに脈々と受け継がれる伝統というものも必ず存在する。この点、ゼミもしかりである。

では、小野ゼミに脈々と受け継がれる伝統とは何であろうか。桜の季節に、つるのやを優先し、コトラ一はその晩に（翌朝まで？）頑張ることかもしれない。木枯らしの季節に、「GFIはどうやったら上がりますか？」が口癖になることかもしれない。しかし、それら年中行事の裏には、必ずといってよいほど、レポートを真っ赤になって返したり、共にパソコンに向かったりという、先輩のケアがあった。私は小野ゼミの伝統はこの1点に尽きると考える。小野ゼミが今までに浴して来た学術分野での数々の栄誉は、そしてこのOB会への出席率の高さは、先生のご指導の賜物であることは厳たる事実であるが、上記の伝統が支えて来たという側面も否めない。

そして、諸先輩方が後輩に真剣に向き合ってこられた際、「滅私奉公」に徹せられたという点は一致するところであろう。少なくとも、私が先輩に教えを請うた際、「面倒だから、ヤダネ！」と言われたことは無い。

私は諸先輩方には及ぶべくも無いが、ひとまず先輩ヅラをして3年を数える。そして、できる限り「滅私奉公」者になろうと思って来た。しかし、いざ「私を滅し」とみると、それから得られるものの多さに驚く日々である。むしろ、「私を滅し」てみなければ、得られないものの方が多く、短絡的な「私」ほど、無意味なものはないのかもしれないと感じている。

幕末の志士、吉田松陰は、「世に身生きて心死するものあり、身亡びて魂存する者あり。心死すれば生くるも益なし、魂存すれば亡ぶるも損なきなり」と述べている。毎年3月は、ゼミ生の約半数が亡びるに伴い（失礼！）、その損に心を痛める季節である。しかし、「滅私奉公」という魂を遺して死してくれるならば、私は小野ゼミにとって決して損なきなりと思う。亡びてからも、ゼミに足を運んで頂きたいのは言うまでもないが。



吉田松陰肖像画